

# 新しい熊本めざして

## — 伸びる九州自動車道 —



植木インターチェンジ

た者は、国民全体の八〇％に達し、しかも年平均三・五回でかけた。

この人たちの旅行目的は「海水浴、潮干狩、釣り」、「自然風景見物」、「ドライブ」などが高位を占めている。

しかも、これらの人たちの四〇％がマイカーを利用し、バスを加えると七〇％の人がくるまを使って旅行している。

九州自動車道は今やこれらの人たちの橋渡しとして登場する。それは、城北地方の本格的な観光レクリエーションの開幕となる筈である。

### □ひかりは西へ

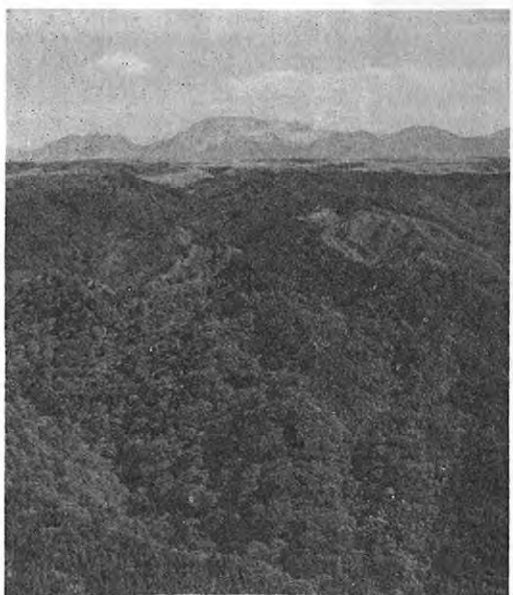
昭和五十年といえは僅か三年先のことだが、国鉄新幹線が博多まで延長される。博多までか、と言ってはいけない。実は、新幹線が開通した場合、観光面からみてひとつのユニークな現象が生じた。

つまり、観光旅行は開通した終着駅で終ることなく、むしろ終着駅を起点として客が散っていくという現象だ。

たとえば、大阪開通では、紀伊半島、能登半島へと観光客は流れた。また、岡山延長では、山陰・四国へと客は殺到した。

そこで問題は福岡延長が実現したときだ。

終着駅博多に降りた客は、どこへむかうだろうか。この場合、福岡から熊本へ客を呼び込む最も大きなパイプの役割を



▲菊池水源上空より阿蘇五岳を望む

でもいられない。まず、道路ができれば、観光客の流入を促し、それが、反面、流出にも便利になることを忘れてはなるまい。唯単なる通過観光地として、空きビン、空きカンだけが残されるところにしようならぬようにしたものだ。

玉名、山鹿、菊池の温泉都市を中核に広域化した魅力ある観光地づくりを進め、あたたかいサービスを行なうことが必要だ。

また、乱開発によって県北全体の魅力が失なわれたりしないよう留意し、地域それぞれの特性に応じた公園づくりや美化緑化に努め、この地の民俗、まつりな

どを生かすことも大事なこととなる。県では、とくにこの地方を「産業観光地帯」とし、カキ、クリ、ミカンなどの果樹を中核とする産業観光に力を入れることとしている。

北九州圏、熊本市圏に加えて、有明臨海工業地帯の本格的な操業開始により、多種多様なレクリエーションをめざしてこの地に人は訪れよう。この地域に新しいレジャーの波が押し寄せるのも間近かだ。

「……人ノ気象ハ質朴ナルベシ……」二百年前の古川古松軒の観察は、図らずも観光サービスの原点を示唆しているようにみえる。

松風の音を聞きながら、南関をめざして彼が喘ぎつつ登ったであろう山道を今日はスマートな車が行き交う。私たちが時折、古人の心にかえてあすの観光を考え直してみてもよいのではなからうか。

(観光課)

果すのが九州自動車道だ。県北の観光を変えるものが実はもうひとつある。それは来秋完成する菊池・阿蘇スカイラインだ。菊池溪谷を通過して大観峯へ抜ける総延長十一・七杆のこの道路は、雲仙、阿蘇、別府を結ぶ新しい国際観光ルートの誕生を意味する。

このルートと縦貫道の交差するところが菊水インターであり、この地は県北の拠点としての役割をもつ。だからこそ、周辺にはゴルフ場などのレジャー産業が新しい町づくりをめざして進出してきているのだ。

### □あすの観光めざして

それでは県北観光の未来はすべてバラ色に包まれているのか。手離しで安心し



追分にいまも残る道標 (八代市)